デモステネスの雄弁----ディオニュシオスの耳

木曽明子

I　アッティカ弁論の第一人者

デモステネス（前３８４-３２２年）といえば，古代ギリシアの弁論の第一人者という評価が定まっているといえよう．前５世紀末に生まれたアッティカ弁論が，議会や法廷から優れた弁論家を輩出し，さらに前４世紀に入って民主政がいっそう市民層に浸透すると，社会を動かす原動力としての弁論の役割は一段と重要性を増し，デモステネスも政治の表舞台に立って活躍したことは間違いない．

しかしながら生存中δεινόςと恐れられてはいたものの[1]，デモステネスが無条件に当代随一の雄弁家という名を恣にしたとは必ずしも言えない．即席の弁論にかけては，デモステネスを凌いだと伝えられるデマデスの名が伝えられるし[2]，『弁論術』を著わしたアリストテレスは，著作中でデモステネスをとりたてて称揚している節はない[3]．さらに法廷や議会での弁論の目的が勝ぅことにあるとすれば，デモステネスが敗訴に終わった例は意外に多いと言わねばならない[4]．しかしながら死後全弁論が残り，後世第一人者の地位を不動のものにしたのは，これらの弁論がその社会的背景を失ってもなお受け手の心を動かす力を持ち，”作品”としての評価に耐えるものであったからであろう。

後世デモステネスの弁論を分析評価し、それによって「アッティカ弁論の第一人者」の名をデモステネスに献じた人は多い．古代修辞学の「天才児」ヘルモゲネスは自身の理論構築の実素材としてデモステネス作品をもっとも多用したし[5]，ラテン文芸の泰斗キケロは「完璧にして洗練の極み」と称え、みずからの政敵弾劾演説にデモステネス作品の通称を冠せて敬意を表した[6]。

本稿はそのようなデモステネス評家の一人であるディオニュシオス・ハリカルナセウス[7]が，デモステネスの雄弁をどう受け止めたか，そのことによってアッティカ弁論評価に，そして文芸批評一般にいかなる意義が生じたかを論ずるものである．そのためにはまずデモステネス以後の弁論の様相を概観し，その流れの中でディオニュシオスのデモステネス弁論との出逢いを再現してみなければならない．

II　実用弁論はすたれても弁論は残った

デモステネスの晩年にはアテナイが政治的独立を失い，ポリスの変質解体も進んで政治弁論など公共の弁論はその場を次第に失うが，人間社会につきものの係争が絶えないかぎり，説得の方法を中心とする弁論が人々の関心の対象であり続け，その理論面が，「修辞学」として次第に広範精緻な体系を獲得して行ったのは当然の成りゆきと言えよう．一方，ヘレニズム期を通じて台頭してきたローマがギリシアを属州として吸収しながらも，その文化の摂取に熱意を傾け，弁論および修辞学を高等教育の主要科目として重視したのも十分頷けよう．というのもローマの政治体制を辿れば，少なくとも共和制末期（前１世紀後半）までは公共弁論の場は十分にあり，有為の青年が公人として世に立つために不可欠な基本的能力として，弁論が第一に求められていたからである．その間ギリシア語弁論は，小アジア沿岸や島嶼とくにロドス島にその中心を移しており，それらの地から迎えたギリシア人教師によって弁論教育の大部分を行なっていたローマでは，それらの地方を席巻していた，いわゆるアジア風文体が優勢になる．すなわち気障な文飾や勿体ぶった言い回しを好み，表現上の華美を競う趣味である[8]．そうした風潮は，すでに弁論を実用の武器としてよりも，聞いて楽しむ技芸とみなす傾向を意味する．

共和制から帝政への移行は，弁論から実用としての機能を急速に奪い，間もなく弁論は演技として聴衆の鑑賞の対象となってゆく．やがて悲劇や喜劇と等しく聴衆を楽しませるパーフォーマンスとして”上演”され，有名歌手の独唱会が人を集めるように，弁論は演説会場に足を運ばせる出し物として人気を集めるようになっていく．そこからデクラマティオの隆盛という歴史現象が起こる．

III　デクラマティオ---鑑賞用弁論の隆盛

デクラマティオなるものを瞥見すれば，民主政という社会的土壌の上に育った弁論が，その本来の機能を失ってもそのまま消滅せず，生き延びて新たな繁栄を見た所以が解明されるであろう．デクラマティオとは，狭義には前１世紀前後からローマにおいて，高等教育の演習として生徒に架空の題目を与え，修辞学の知識を応用しながら一場の演説をさせる模擬弁論を意味した．さらに学

校教育を終えた成人も，市民の教養として私的に類似の模擬弁論修練を行なったようである[9]．「カンナエの戦いの後,ハンニバルはローマに進軍すべきであるか否か」（説示演説suasoria），「外国人は城壁に登ることを禁じられている．彼は外国人である．彼は敵の襲撃の際，城壁に登ってこれを撃退した．彼は有罪か無罪か？」（論判演説controversia）といった題目をかかげて弁舌の錬磨に励むのである．そこでは何よりもまず表現スタイルや文章の品格，気の利いた格言類が使われているか，また歯切れ良く発音されたかなどの表出性が問題とされ，後者のような法廷弁論の形式を取る場合も法律は二の次で，議論の目新しさ，情景描写の巧拙など,「見事に話すこと（εὐ λεγεῖν）」が最重視されるようになる．鑑賞される演技，客の喝采を競い合うエンターテインメントとしてのデクラマティオは，ギリシア語，そしてやがてはラテン語で盛んに行なわれ[10]，職業的弁論家（declamator）によって”興業”さえされるようになる.初代皇帝アウグストゥスは公開のデクラマティオを聴きに行ったし，のちにネロはみずから演じた[11].いうならばデクラマティオは，言論の自由に制限のなかったとは言えない帝政期を通じて，教養ある有閑階級のローマ人に知的スポーツとしてもてはやされたのである．

当初は架空の論題とはいえ実在の地名が入るものなど，実生活に根ざしたところのあったデクラマティオは，やがて次第に現実から遊離して神話や物語(メロドラマ）から借りた題目のもとに弁才を競う，帝政期ローマのあだ花とも言うべき変容を遂げ，1世紀末（96年頃）に完成したと伝えられるクゥインティリアヌスの『弁論家の教育』は，こうした訓練や練習がややもするといたずらに美辞麗句を連ね，芝居がかった身ぶりを伴って行われる空疎な熱弁をもってよしとする時流を批判して，真に古典的な弁論・修辞術の模範を示そうとするものであった．

このようなデクラマティオの隆盛は，人間が弁論に実戦の機能（議会,法廷での真剣勝負）を認めるだけでなく，鑑賞を目的とし得る芸術的機能をも見い出すがために招来されたと言えよう．だが言語の芸術的機能は,本来実用的機能と矛盾するものである．

IV　言語の二面性　論理と修辞のせめぎあい

言語の別を問わず，伝達の手段である言葉が意味明瞭で聞く者の理知に受け入れられるためには，その言語を操作する際の規則（文法）にかなっていなけ

れば機能を果たさない．文法とは同じ言語を共有する者同士の間に成立している決まりだからである．言い換えれば，考えなり感情なりを自分以外の人にわかってもらう，つまり社会化するための規則である．文法の最小成立単位である単語はそれぞれ意味を持つが，単語が構成する文は，文法に従ったときのみ意味のある文となり，意味のある文から論理が構成される．文法すなわち意味，意味すなわち論理とは言えないが，文法なくして文の意味は成立せず，文の意味なくして論理はあり得ない．論理が他者に受け入れられることが説得であり，説得力は論理から生まれる[12]．しかし人間は，論理によって他者を説得しようというときも，情熱や信念が及ぼし得る感化力を動員しようとする．説得者は，文法に叶って意味を伝えただけでは満足できず，奔り出る想念を言葉にする，すなわち社会化する過程で殺ぎ落されてしまうものを失うまいと懸命になり，論理を伝えるべき文法を破ってでも聞き手の心に食い入ろうと言葉を探す．もっとも単純な例として，次の二文を挙げよう．

A　この花は綺麗だね．

B　綺麗だねェ，この花は．

Aは花を見た人物がその印象を文法的，標準的な文で表現し，相手の同意を求めている．Bでは通常の語順が倒置され，いわば標準的文法が破られているが，そのように非文法的な表現形態を取ったことが，却って感に耐えぬ，といった話者の気持をじかに伝え，Aにはない衝撃力を生んでいる．とすると話者は，「文法＝論理」という足枷をはめられながらも，これを組み伏せて，理知では伝えきれないものを表そうともがき，理知以上のものを伝え得る言葉を探して訴えようとしているのであり，こうした精神の働きから「修辞＝言葉の工夫」が生み出されると言えよう．したがって論理と修辞は本来的にせめぎ合う（相剋）関係にある．言い換えれば修辞は文法の規制を受けながらも，これを超えようとする葛藤であると言える．聴き手も，工夫されて，音声として刺激的な模様や色合いをもって働きかけてくる言葉に，論理をこえた力を感じて心を動かされるとしても不思議ではあるまい．

とすると弁論家が実戦に耐えるべく理知に訴える以上に，修辞，つまり言葉を魅力的に衝撃力のあるものに装うことによって聴衆を動かそうとするならば，言語の論理性を貫きながらも論理を脅かす修辞を駆使するという，まことに微妙な手さばきが求められるわけだが，それは使用言語の特性と深く関わっていることを確かめておかねばならない．

V　ギリシア語の特性

ギリシア語口語の音声は，５度音程に相当する音程差を持ち，音節の長短も与って,起伏に富んだ極めて旋律性の高いものであったという．各単語の持つ鋭調重調曲調の３種類のアクセントが，これに微妙な趣を添えたであろう[13]．

そして文法（＝意味）は語尾変化によって決定された．語と語の関係を明示する語尾変化は，名詞ならば（主格単数から複数対格まで）１１，形容詞なら（これが男性女性中性につく３通りを考えれば）３３，動詞ならば（時制７に,直説法接続法希求法命令法の法が４，不定法，分詞まで入れれば６，能動受動に中動を足して３で）１語が２０３通りに変化する.その中から採用された語形は,間違いなく意味を保有しつつも語順は極めて自由である．英語など近代ヨーロッパ諸語とちがって，語順は文法にはほとんど与らないからである[14]．とくに散文は，韻律に拘束される韻文より遥かに語順は自由である．一方で多数の変化形は，中性名詞であれば単数主格と対格の時はいつでも＜ον＞，中動相動詞１人称単数ならいつでも＜ομαι＞で終わるというふうに一定の規則性（音の類似）が顕著である．とすれば弁者は，語尾変化の持つ音の規則性を自由な語順で操作し，散文を韻文に近づけることができる（韻律とは音の規則性である）．つまり韻文のように拘束されないけれど，出したいところで韻文の持つ音楽性つまり旋律性とリズム感を生み出し詩＝韻文の持つ美しさを出すことができる．そこに形作られる文彩形式の工夫によって文章の魅力すなわち芸術性が生まれる．このようなギリシア語の特性を使いこなすことが弁論家に求められていたはずであるが，『弁論術』を著わしたアリストテレスは，そういう弁論家の技術をどう見ていたか.

彼が弁論における散文のリズムを重視していたことは間違いない．『弁論術』第３巻８章において彼は詳細にこれを論じている．しかし彼は詩と散文を明確に区別して，説得（＝論理）の効力を持つ散文に対し，詩の持つ韻と形式性は「人工的な感じがして信用されにくい（λέγεῖν πεπλασμένως †τουνάντιον=ἀπίθανον）」と断じた（『弁論術』1404b19）．また「韻をふんだものは作為的であると思われるから説得力に欠ける（ἀπίθανον, πεπλάσθαι γὰρ δοκεῖ）」と繰り返して述べ（『弁論術』1408b23），散文は説得（＝論理）の効力を持つが,詩の持つ韻律すなわち形式性は説得力を殺ぐ，という見方を明確にしている．美しさを第一義とする言葉遣いが，説得をめざす（信用される）実用弁論の妨げとなり得る点に注目したのである．それは措辞や文彩などの修

辞的要素をあくまで「説得」を生むための手段と位置付けていたためといえる．弁論をもっぱら実用の言語行動とする認識は全巻をつらぬいているのである．著作が生み出された時期が，議会法廷弁論の全盛期とほぼ一致するところから，その認識は当然のことと言えよう．さればこそアリストテレスは同じ言語という媒体を使いながらも，芸術的感動（「快ἡδύ」「嘆賞すべきθαυμαστόν」）を生み出す領域を『詩学』として別立てで論じた．弁論の目的を「説得」としたアリストテレスは，文学（悲劇）の目的を「快ἡδύ」と規定して，これを別ジャンルと見たのである[15]．

それに対し観賞用弁論の時代に生きた前１世紀の人ディオニュシオスは，優れたアッティカ弁論が，論理に基づく説得力を発揮しながらも，同時に音吐朗々の響きが「快」と「美」を生み，聴く者をいつしか虜にしてなずける力に注目した．すなわち「響きのよさ（εὐφωνία）」が弁論効果の鍵になり得ることに着目し，それが生み出す「快ἡδύ」と「美καλόν」に関心を注いだのである．

VI　ディオニュシオス，弁論術教師から修辞学者へ

ディオニュシオスは，エーゲ海東岸の町ハリカルナッソスから前３０年頃ローマにやってきたギリシア人である．キケロなどによって漸くラテン語ラテン文芸が一定の成果を得て，いよいよラテン文芸の黄金期（アウグストゥス時代）に入ろうとしていた頃，高等教育の主要科目である弁論の教授者として迎えられたディオニュシオスは，ローマの上流青年に演説の練習をさせることを主要な任務とした，大学教師ないしは私塾教師的な生活を営んでいたらしい[16]．彼は手本を模倣するという演習の伝統的方法を日々実行していたのであるから，アテナイの弁論家の語法を徹底的に調べ，これを音声として耳で確かめる機会に恵まれていたであろう．折しもローマの知識人の間では，ややもするとアジア風の華美矯激な表現に流れる傾向のあったギリシア語弁論演習において，正統なアッティカ弁論の簡潔典雅な表現を再興しようという機運が熟しつつあった[17]．そういう時流の中でディオニュシオスは，祖先の残した言語遺産に誰よりも強い民族的誇りをもって接したが，生徒の模倣の手本として供するアッティカ弁論を，もはや生死を賭けた勝負としてではなく，鑑賞されるべき作家の作品としてとらえていた．これを表現芸術的尺度による分析の対象としたディオニュシオスは，文章美学を論ずる修辞家になるべくしてなったのである[18]．

ディオニュシオスによると，作文の要諦は文章の二つの要素，（1）文体を明晰にする，必要不可欠な徳（ἀναγκαῖον）と（2）強調し，際立たせる（περιττόν）ための付加的文飾（ἐπίθετον）をどう扱うかである[19]．（1）ἀναγκαῖα ἀρετήとは「語彙が極めて純正で辞句が正確で，はっきりしてごく普通の言葉が使われているところに認められる」（『デモステネス論』15）．これに対し，（2）ἐπίθετον＝付加的文飾ゆえに，文章は崇高，厳粛にも繊細，流麗にもなり得ると言って，「後者は前者の裏付けがあるときにだけ効力を持つ」（『デモステネス論』22）．と後者の従属性を言いつつも，しかし「付加的文飾（ἐπίθετον）こそ弁論家の才能を示す」（『デモステネス論』56，『トゥキュディデス論』22）と，後者なくしては文章は伝達の用途を足しただけの，平板平凡なものに終わると言う．文法と修辞のせめぎ合う関係を的確に指摘しているではないか．

そういう原理に基づく文章構成がギリシア語の特性と結びつくとき，観賞用弁論の成否は語の配列によって左右されることを見抜いたのがディオニュシオスである．常住坐臥耳にするラテン語との比較の中で，母国語の魅力が響きの美しさ（εὐφωνία）に根本的に依存することを体験的に感得し，その美しさの鍵を語の配列に見たのである．声楽家のリサイタルのように人気演説家が客を集めるデクラマティオの時代は，ディオニュシオスが注目した快や美の概念を，実際に耳で聞いて確かめるための，好個の環境を形作っていた．

VII　ディオニュシオスの耳がとらえたもの

ディオニュシオスがその語の配列のゆえに，誰よりも評価した弁論家がデモステネスである．ディオニュシオスは主著『語の配列について（ΠΕΡΙ ΣΥΝΘΕΣΕΩΣ ΟΝΟΜΑΤΩΝ）=文章構成論』において，デモステネスの文章が語の配列によっていかに音声の美しさ（εὐφωνία）を獲得するかを示す．時に詩の韻律に近付き，しかもわざとらしさを微塵も感じさせず，まことに密やかに詩のリズム感を帯びるに至っている様子が多数明らかにされている[20]．ここでは文節（κῶλον）の区切りの工夫がリズム感を際立たせることを指摘している文例を見よう．

彼がデモステネス弁論の最高傑作と明言する『冠について』１７９節の１文である．・『冠について』は前３３０年デモステネス５４才の時の弁論である．その６年前，デモステネスの国家的貢献を授冠をもって顕彰しようという動議

が民会の賛成多数を得て議決されたのであったが,この授冠を違法とする告発が政敵アイスキネスから出され,それに応えてデモステネスみずからが演壇に立った自己弁明演説である.,

οὐκ εἶπον μὲν ταῦτα, οὐκ ἔγραψα δέ,

οὐδ' ἔγραψα μέν, οὐκ ἐπρέσβευσα δέ,

οὐδ' ἐπρέσβευσα μέν, οὐκ ἔπεισα δὲ Θηβαίους,

「私はそれらのことを言っておきながら動議せずということはなく,動議しておきながら使節を務めずということもなく,また使節を務めておきながらテーバイ人説得を果たさずということもなかった.」

散文であるゆえ一続きに書かれる（言われる）べき3文節を,ここでは文章構成の秘密をより明確に示せると期待して3行に書き改めたが,各行は通常流麗を損なうからという理由で避けられる母音衝突を故意に使うことによって,大胆にそして明瞭に区切られている. 加えて各行にμεν---δεの枠組みがはめ込まれることによって, 3文節の区切りがおのずからなるまとまりを示し, 辞句の拡散を防いで意味の明晰を確保する. ディオニュシオスは,もしこれが以下のように書かれていたならば, ここに見られる力と優美さは全く失われただろうと言って平板並列的な作文を例示する.

'ταῦτ' εἴπας ἔγραψα, γράψας δ' ἐπρέσβευσα, πρεσβεύσας δ' ἔπεισα Θηβαίους",

「それらのことを言って私は動議した.そして動議して使節を務めた.そして使節を務めてテーバイ人を説得した」

ディオニュシオスは文節の区切りという音声上の効果の模範例として,この文例を挙げるにとどめたが, われわれはなお,彼が詳説を避けた（あるいは教場で生徒に向かって口で言ったかもしれない）他の修辞的契機をも見ておかなければならない. そもそもこの弁論は上述のように,自分は授冠に値するだけの貢献をしたと訴えて, 宿敵アイスキネスの糾弾を撃退し, 授冠の正当性を主張しようとする主旨のものである.（だがアイスキネスの指摘する違法行為が事実であることは歴然としており,そういうマイナス点を覆して授冠の栄誉を正当化しようという立場にあるデモステネスにとっては, 論理だけでは勝ち目のない, いわば背水の陣に立つ弁論である）中でもこの箇所は,自分の功績を数え上げたところで最も重要な事績に触れる, いわば勝敗の分かれ目となる瞬間の発言である. そういう山場にふさわしくトリコロン形式[21]が選ばれており, その効果を最大限に生かしている. すなわち1つのことを言うのに3段構

えで臨み，1よりは2を，2よりは3を，と次第に調子を高めて行って（＝漸層法　κλῖμαξ）3段目で絶頂に至る表現形式である．聞いて覚えやすく意味の重要さも3段階の展開とともに深く記憶に刻み込まれ，大会衆を前に大見得を切ってみせるシーンなどでは絶大な効果を発揮し得る形式である．そこを十二分に意識したのであろう，上述のように母音衝突を逆用するという大胆な語法を敢えて選んでいる．だが大胆さはそれだけではない．ディオニュシオスの書き換え文と比較すると，重ねられた否定詞が注意を引かずにはおかない．一般に否定文は肯定文より聴き手に強く訴えるものである．（「ワンと吠えたらお菓子をあげる」より「ワンと吠えなければお菓子をあげない」と言われた方が強く感じるのではないか？）その否定詞οὐを6回も使い，否定詞の持つインパクトの強さを限度すれすれまで利用している．限度すれすれとは，否定詞を連ねると意味の定着が不安定になり，誤解を生む危うさが生ずることを指す[22]．否定を重ねたために意味のぼやけかねない文脈は，それを辿る聴き手に微妙な緊張を強いるが，それを救うかのようにμεν---δεで区切りをつけられた3段構えの均衡ある形式が，安定感と重量感を保証する[23]．つまり意味のゆらぎを引き起こすかに見える文の流れをきわどい所でサッと搦めとって理路の錯綜を断ち切り，トリコロンの修辞効果によって畳み掛けるように迫る．まさに論理と修辞のせめぎ合いと四つに組んで格闘して，そこから有無を言わせぬ衝撃力を生み出した離れ業と言うべきであろう．トリコロンは極めて形式性のあらわな表現形式である．アリストテレスによれば「信用されにくい」言い回しである．その形式を故意に選びながらそのマイナス点をプラスに変えた力の源泉は，語の配列の工夫によって生じたリズム感，旋律性すなわち音楽性であった．３２４節にわたる長大な弁論である『冠について』は，前述のような事実としての違法性を抱えながらも勝訴を勝ち取ったという希有な弁論であった．原告アイスキネスはその判決を諒とせず，アテナイを去ったと伝えられる[24]．流離の地でアイスキネスが原告演説を再演してみせたとき，「敗訴に終わったとは不可解だ」と聴衆は訝ったが，それにこう答えたというアイスキネスの言葉が伝えられている：「これに対するデモステネスの答弁演説を君たちがその耳で聞いたなら、（敗訴は）無理もないと思っただろう」[25]．宿敵の雄弁の力を認めぬわけにはいかなかったアイスキネスの胸中の無念を明かすものであろう．『冠について』はすぐれた観賞用弁論がそうであるように，快い諧調がいつしか聴き手の心に食い込み，やがてはその言葉一つ一つに抗い難く聴衆が引きずられて行く，絶倫の迫力と馴致力を有していたのであ

ろう.

VIII　修辞に溺れた弁論家もいた

ディオニュシオスの示す失敗例を比較に出せば,論理と修辞の手さばきの難しさはいっそう得心できよう.イソクラテスはその文体が洗練をもって夙に声名高く,母音衝突や発音しにくい字母結合を避け,手の込んだ工夫を凝らしたことで知られる.ディオニュシオスはイソクラテスをいわゆる中庸体の代表者と認める伝統的評価を受け入れ[26],まずこう褒めている.「語彙の純正このうえなく,辞句が正確ではっきりしてごく普通の言葉が使われており,文体を明晰にするほかのすべての美徳を備えています.そして付加的文飾もふんだんにあります.すなわち崇高,厳粛で堂々としており,秀麗で心地よく,しかも申し分なく端正です.」しかしながら「わかりやすさを目指すあまり,程合いをないがしろにしている」と批判し,その筆致が洗練を求めるあまり危うくコントロールを失う（失った）瞬間を鋭く捉えて容赦ない批判を浴びせる.槍玉に挙げられるのは並置（パリソン）,対置（アンティセシス）,押韻（パロモイオシス）[27]などの文彩の過剰である.例文の一つに『民族祭典演説』７６が挙げられる.この弁論家の最高傑作の呼び声も高く,一説には推敲に１０年を費やしたと伝えられるものである[28].この個所は,父祖たちがいかに徳操高邁で廉潔な男子の鑑であったか,を述べるものである.

Οὐ γὰρ ὠλιγώρουν τῶν κοινῶν, οὐδ' ἀπέλαυον μὲν ὡς ἰδίων, ἠμέλουν δ' ὡς ~Σλοτρίων, ~Σλ' ἐκήδοντο μὲν ὡς οἰκείων, ἀπείχοντο δ' ὥσπερ χρὴ τῶν μηδὲν προσηκόντων·

（・・・彼ら（父祖たち）は国事を等閑にせず、これをわがこととして貪(むさぼ)らず、ひとごととして軽んじず、むしろわが物を扱うかのように配慮し、借り物には当然であるかのように遠慮し、）

Οὐδὲ τὰς θρασύτητας τὰς ~Σλήλων ἐζήλουν, οὐδὲ τὰς τόλμας τὰς αὑτῶν ἤσκουν, ~Σλὰ δεινότερον μὲν ἐνόμιζον εἶναι κακῶς ὑπὸ τῶν πολιτῶν ἀκούειν ἢ καλῶς ὑπὲρ τῆς πόλεως ἀποθνήσκειν, μᾶλλον δ' ἠσχύνοντ' ἐπὶ τοῖς κοινοῖς ἁμαρτήμασιν ἢ νῦν ἐπὶ τοῖς ἰδίοις τοῖς σφετέροις αὐτῶν.

(さらに彼らは猪突する仲間を褒めそやさず、みずから猛進することに励まず、一方で市民の間に汚名の拡がることを恐れこそすれ、祖国のために名誉の死を遂げることを辞さず、他方で国家の過ちゆえに恥じ入るさまは、昨今の人間が個人的過ちゆえに恥じることの比ではなかった。)

Τὸν αὐτὸν δὲ τρόπον καὶ τὰ τῶν ἄλλων διῴκουν, θεραπεύοντες, ˜Σλ' οὐχ ὑβρίζοντες τοὺς ''Ελληνας, καὶ στρατηγεῖν οἰόμενοι δεῖν, ˜Σλὰ μὴ τυραννεῖν α ὐτῶν, καὶ μᾶλλον ἐπιθυμοῦντες ἡγεμόνες ἢ δεσπόται προσαγορεύεσθαι καὶ σωτῆρες, ˜Σλὰ μὴ λυμεῶνες ἀποκαλεῖσθαι,
(そして同じ仕方で彼らは他国との関係を追求した、すなわち、同胞ギリシア人に、蔑視ではなく奉仕によって接し、暴君としてではなく将軍として臨まねばならぬと考え、支配者ではなく指導者と呼ばれ、破壊者ではなく救助者と仰がれることを願い、)

この類のものがこれでもかこれでもかと繰り出されると，聴衆は嫌悪を催し，飽き飽きしてうんざりし辟易する，とディオニュシオスは手厳しい．イソクラテスは音声の規則性を散文にちりばめ，韻文に近づけて詩の美しさ（脚韻）を出そうとしているのだが，程合いを超えたために，「思考（＝論理性）が文体のリズム（＝芸術性）の奴隷になり下がり，巧妙すぎて真実味が薄れる」（『イソクラテス論』12）のである．従ってせっかく聞き手の倫理観に訴えるはずの言葉の効果が殺がれている，とディオニュシオスは攻撃する．この評言は，先に引用したアリストテレスの韻文観「詩は人工的な感じがして信用されにくい[29]」に一致するものである．すなわちディオニュシオスは，弁論が芸術性に流れ過ぎた点を非とするのである．

ちなみにこのイソクラテスの過剰なまでの形式性は，制御を過たずに使えば演示弁論に大きな効果を発揮し得る手法である．演示弁論とは儀式や祭典で行われる演説を指し，祖国礼讃や故人哀悼など，威儀を正した題目，気韻高雅な語彙などによって聴衆にある種の高揚感や心たぎる感銘を与えることを旨とする[30]．従って快いリズムや絢爛華麗な文飾で聴衆を陶然とさせることが狙いとなる．これはまさに観賞用弁論の時代に歓迎されたものであった．しかしイソクラテスの弁論は，アテナイ末期の社会的混乱を背景に危機的状況での市民の決断を促す，といったものが多かった．いわば実用と芸術という分裂した二原理を，イソクラテスは超克できなかったのである．それに対しもっ

ぱら法廷弁論や議会弁論を舞台としたデモステネスは，係争相手に勝ち,また議事を引っ張って行く実戦弁論，言い換えれば生き死にを賭けた実戦の場につねに晒されていた．そこでは弁論は身を鎧い敵と斬り結ぶための武器であり，鑑賞用の愛でるべき美術品ではなかった．そのような実効を第一に問われる弁論において,ややもすれば論理性を薄めるものとして働きかねない芸術性，とりわけ音楽性を，なお有効に活用したデモステネスの雄弁にディオニュシオスは着目したのである[31]．言語矛盾を顧みず言うならば，響きの美しさ（εὐφωνία）とは修辞の一部分でありながら修辞そのものであるとも言えよう．弁論におけるεὐφωνίαすなわち芸術性が，論理性と衝突しながらもその軋轢の火花の中から，圧倒的な迫力を持った言葉となって躍り出る有様を,修辞家ディオニュシオスはデモステネスの雄弁の内に聴き取ったのであった．

IX　文芸批評家ディオニュシオス

弁論術教師ディオニュシオスは，日々の演習の教材であるアッティカ弁論が時代を超えて生き続ける力を身をもって感得し，修辞家としてデモステネスの卓越性の所以であるεὐφωνίαを解き明かすことによって，アッティカ弁論の第一人者の名をデモステネスにより相応しいものにしたが，そうした活動を足がかりにみずからは文芸批評という領域を切り拓いていく．論評の対象を文芸作品にまで拡げたディオニュシオスは，ホメロスの”シシュポス苦役のくだり”（永劫の刑罰を受けるシシュポスを叙した『オデュッセイア』１１巻５９３～６行）の分析をもって，「古今の名批評」と称えられる評言を残した．これはデメトリオス（『文体論』72）も取り上げた個所である．苦役が捗らぬ様子が長音の連続と息継ぎ（オー,オーという長音）やけわしい音の字母によってまざまざと描き出される手法が指摘されている．しかしその直後転がり落ちる石さながらに，短音節と流音が連ねられる技巧には，ディオニュシオスのみが着目している[32]．ここに見られる精緻な分析は，文芸批評家の最大の武器たる繊細豊潤な感性，鋭い聴覚を余す所なく示すとともに，そこに働く本能的感受性＝「言葉にならない感覚ἄλογος」に，論理を受けとめる理性（理知λόγος）と対等の市民権を与えるものであった．つまり「美καλόν」や「快ἡδύ」に感応する能力を正面から議論の俎上に載せ，文学的感性を究極のよりどころとする文芸批評の地歩を確実に拡げるものであったと言える.このようなディオニュシオスの文芸批評家としての功績を,１８世紀のイギリス

の詩人アレクサンダ・ポープはこう言って称えている.

See Dionysius Homer's thoughts refine,

And call new beauties forth from ev'ry line!

（見よ， ダイオナイシアスがホーマーの思想に磨きを加えたうえ，
あらゆる詩行から新しい美を呼び起こすのを.）

Alexander Pope, *AN ESSAY ON CRITICISM*

注

（1） 雄弁な（δεινός），雄弁（δεινότης）はデモステネスを形容する語として生存中から用いられた. δεινόςは「恐ろしい」「激しい」「力強い」の意もあり、「恐ろしいほどの技巧に長けた」という弁論の技巧の卓越性の意味と「激越な調子」の意味との区別はつきにくい. 以下のP.Costil, L'esthetique litteraire de Denys d'Halicarnasse, Paris, 1949 p.485の語釈がもっともよく説明するであろう.「弁論家の雄弁さとは、まず第一に，敵に廻すと恐しい巧妙さであり，素朴さの対極にある、詭計にかぎりなく近い手管である. 技巧的には雄弁とは弁論術の有効性であり，目標である説得を生み出す能力である. それに到達する手段はさまざまである. 雄弁な弁論とはソピスト的言述と装飾性をその特徴とする. すなわち「手のこんだ言い回し」，稀語，凝った文彩形式，付加的文飾などゴルギアス１派のそれであり，峻厳体で目立つものであり，その規範はトゥキュディデスである.」

（2） プルタルコス『対比列伝 デモステネス』10, クインティリアヌス 12.10.49.

（3） アリストテレスの生没年は前３８４-３２２年と伝えられ,デモステネスのそれと同じである. 『弁論術』中でのデモステネスへの言及回数は，例えばイソクラテスへの１３回に比べると２回と少ない.（1397b7は同名の他人か？いずれにしてもある事件への言及の中で名を出されたものにすぎない） 2回のうちの１回（1401b34）は，見せ掛けのエンテュメーマだが有効なものを列挙する中で，デマデスがデモステネス相手に用いた事例を挙げたものであり，アリストテレスはデマデスに軍配を挙げている. 他の１回（1407a6）はデモステネスの修辞を模範例として挙げたものである. 同時代人の修辞の模範例とし

ては，アイスキネスを１回（1417b1）挙げている．

（４）　例えば『アンドロティオン弾劾』『アリストクラテス弾劾』『ティモクラテス弾劾』など初期の作，また代表作の一つとされる『使節職務不履行について』は敗訴．

（５）　ヘルモゲネスは代表作の一つ『文体の種類について』において，優れた文体を構成する七つの特性を論じ，そのすべてが完璧な形でデモステネスに見られると言う．

（６）　perfectos et perpolitosと『弁論家について』1.58．キケロはマケドニア王ピリッポスを弾劾する演説４編を残したデモステネスに倣って，政敵アントニウスに対する弾劾演説を『ピリッピカ』と名付けた．

（７）　ディオニュシオスの名の古代名士は多く，本論で扱うディオニュシオスは，通常出身地名「ハリカルナッソスの」を被せて呼ばれる．本稿では以下ディニュシオスとのみ．

（８）　こうしたいわゆる舞文曲筆はアジア風文体と呼ばれ，ヘゲシアス（前250年頃に壮年期．著作に『アレクサンドロスの生涯』）がその代表者と目された．ラテン語文体についても対立があったらしく，キケロは「誇大、アジア風，過剰（tumidum et Asianum et redundantem）」と評されてアジア風文体派に数えられた時代もあったが（クインティリアヌス12.10, 12-14，『弁論家について』の55B.C頃を指して），キケロ自身『弁論家』230（46B.C.）ではアジア風を酷評している．

（９）　M.L.Clarke, RHETORIC AT ROME, A Historical Suevey (London 1996) p.86.

（１０）　アウグストゥス帝時代にはすでに、使用言語としてラテン語が優勢になったとされる．大セネカ『論判演説集』9.3.12-3参照．

（１１）　大セネカ『論判演説集』2.4.12,10.5.21およびスエトニウス『皇帝伝』ネロ1参照．他にティベリウス(『説示演説集』3.7) マエケナス，アグリッパ(『論判演説集』2.4.12)など．

（１２）　アリストテレスは，弁論が説得をもたらし実用的機能を果たすための第一の要素として，エンテューメーマ（説得推論＝ありそうな論理）とこれを補うパラデイグマ（例証）を挙げた．

（１３）　ギリシア語音声の５度音程については，ディオニュシオス・ハリカルナセウス『文章構成論』11.

（１４）　ギリシア語にも多少の語順拘束があることは,無論である．否定詞

は修飾する語の前に置く，形容詞の修飾関係と述語関係を冠詞の位置で区別する等々.

（１５）　ただし弁論と悲劇が重なるところのあることをも,アリストテレスは認識していたと言える. 両方とも「ありそうなことτὸ　εἰκός」に従って言語世界を構築すべきことを強調しているからである. 情動や感覚を含んで総合的に「人の心を動かす」ことを意味すると思われるギリシア語πιθανόνは,アリストテレス『弁論術』にあっては常に理知的判断に関して使われている.

（１６）　ディオニュシオスには『ローマ古代史』なる大著もある. 弁論術教師を勤めるかたわら、こうした著述に専念できるだけの経済的余裕があったと考えられ，アウグストゥス帝を頂点とするローマ貴族の中にパトロンを想定する評家もいる.

（１７）　アジア風に対するアッティカ風文体再興のうねりは前５５～４６年ごろには見られたか？キケロの『弁論家について』にはその形跡がないが、『ブルートゥス』『弁論家』では目立って論じられているところから，そういう推測がある.

（１８）　キケロの青年時代に未だデクラマティオの指導者たちであったギリシア人は，ラテン語が優勢になるにつれて次第に修辞学教授（＝理論家）になっていった. キケロより一世代遅くローマへ来たディオニュシオスも同様の経歴を辿ったと考えられる.

（１９）　『トゥキュディデス論』22『デモステネス論』24など.

（２０）　例えば『文章構成論』25によれば,『アリストクラテス弾劾』冒頭

μηδεὶς ὑμῶν, ὦ ἄνδρες' Αθηναῖοι, νομίση με

は以下の韻脚に分けられ，あと短長長の３音節が付けばアナパイストス・テトラメトロス・カタレクトゥスと.

――――｜――∪∪―｜――∪∪―｜∪（∪――）

しかしμε 以下に、主要写本テキストからの異動がある.

（２１）　トリコロンの技法は，今日にいたるまでアメリカ歴代大統領の就任演説にも認められ，いずれも演説中の”さわり”というべき個所に使われて絶大な効果を収めている.

（２２）　ギリシア語の二重否定は必ずしも肯定ではない. 否定詞の反復については"Accumulated negatives in Greek do not cancel one another so long as the added negative adds a new idea."(S.H. Butcher, Class. Rev. i.220)がわかりやすい.

（２３）　最後の３音節がモロッソスのリズムをなし，重みが感じられる.

（２４）　伝プルタルコス『十大弁論家伝アイスキネス』840D-E.

（２５）　『クテシポン弾劾』142で.アイスキネスは「事実はひどい目にあわされているのに，デモステネスの語の配列ὀνομάτων σύνθεσιν にうっとりしている人々」を見ると恐怖を覚える，と言っている.

（２６）　アリストテレス『弁論術』以後，措辞,文体などについてテオフラストスの他にストア派，エピキュロス派の理論家などが論じ,ディオニュシオスに連なる文芸批評的伝統を形作ったようであるが，著作群は現存しない.その伝統に沿えば，文章は荘重体,中庸体,流麗体に３分されていた.

（２７）　パリソン＝パリソシス＝イソコロン：類似の文節（単語）と文節（単語）が並置され,その長さが等しいもの.アンティセシス：類似性と対照性を持つ文節（単語）と文節（単語）が対置されたもの.パロモイオシス：　並置された文節の対応箇所に同じ響きの音節が置かれ,それが文（節）末であれば脚韻となる.パリソシスの対応度がもっとも高いもの．ディオニュシオスは例文中の下線部の語を「パリソンの洪水」と呼んで批判する.

（２８）　伝ロンギノス『崇高論』4.2. 伝プルタルコス『十大弁論家伝イソクラテス』837Fによれば，１０年とも１５年とも.

（２９）　上掲V節参照。アリストテレス『弁論術』1404b19.

（３０）　アリストテレス以来，弁論は上述の法廷弁論，議会弁論およびこの演示弁論の３種に分類される.

（３１）　ディオニュシオスの指摘は,むろんεὐφωνίαの卓越という点に留まらない.たとえばデモステネスの弁論の総体的な卓越性の一因として，いかに３種の文体や３種の弁論形式の適切適宜な混用が果たされているかを挙げている.たとえば法廷弁論である『アリストクラテス弾劾』や『冠について』の随所に、また『レプティネスへの抗弁』では国家功労者カブリアスやコノンらを賞賛する箇所で,演示弁論的叙述が極めて効果的に取り入れられている例などを挙げている（『デモステネス論』45）.

（３２）

καὶ μὴν Σίσυφον εἰσεῖδον κρατέρ' ἄλγε' ἔχοντα,　593

λᾶαν βαστάζοντα πελώριον ἀμφοτέρῃσιν.　594

ἦ τοι ὁ μὲν σκηριπτόμενος χερσίν τε ποσίν τε　595

λᾶαν ἄνω ὤθεσκε ποτὶ λόφον· ~Σλ' ὅτε μέλλοι ὓὓ 596

ἄκρον ὑπερβαλέειν, τότ' ἀποστρέψασκε Κραταιΐς· 597

αὖτις ἔπειτα πέδονδε κυλίνδετο λᾶας ἀναιδής. 598

オー,オーという長音やけわしい音の字母=596行第2脚. 第5脚からは,転落する石のように流音が連続し,598行の長音節7個は,普通より短く発音されて岩石の急降下さながらに語の速度を速める.